

学術研究実績報告書

申請書との変更点およびその理由(内容、日程、実施場所、参加者等で変更があれば記入)

研究実績概要

研究代表者(申請者氏名・所属機関・職名):

稲水伸行・東京大学大学院経済学研究科・准教授

共同研究者(氏名・所属機関・職名):

稲田昂弘・京都先端科学大学経営学科・講師

研究課題名:

「エージェント・ベース・シミュレーションによるプラットフォーム・ビジネスのガバナンスに関する研究」

研究期間: 2020年 4月 1日 ~ 2022年 3月 31日

概要:(1,000字以内で記述)

我々は以下の2つの研究成果を得た。論文1では、エージェント・ベース・シミュレーションを用いて、ソーシャルメディアのようなピアツーピアのプラットフォームにおけるガバナンスの細かな調整を分析した。具体的には、参加制約のレベルと制約を変化させるタイミングの異なる3つのガバナンス・シナリオ(オープン、クローズド、ダイナミック)が、参加者の量、質、多様性のアウトカムとプラットフォーム企業の業績に与える影響を検討した。それらのシナリオを比較した結果、アウトカムのバランスが良いダイナミックなガバナンスによって、プラットフォーム企業の業績が最も高くなることを示した。この結果は、参加制約のレベルだけでなく、制約を変化させるタイミングの重要性を示す。またプラットフォーム内の多様性という新たな研究の方向性を示すものでもある。論文2では、逸脱事例およびエージェント・ベース・シミュレーションにより、一見オープンではないP2P取引プラットフォームが、よりオープンな既存プラットフォームとの競争に成功するためのメカニズムを明らかにする。よりオープンであることが競争優位につながることを示唆する経験則もあるが、我々はその反例を観察している。観察されたメカニズムを反映して、我々のシミュレーションでは、ユーザー構成が変化すると、参加者はユーザーのタイプに応じて高い開放性と低い開放性を使い分けることで競争優位を獲得することが明らかになった(差別化された開放性戦略)。逆に、長期的には、一様な開放性戦略の方が環境変化にうまく対応できる可能性があることがわかった。プラットフォーム企業のオープンネス戦略と競争優位性に関する先行理論を拡張・精緻化したことが、本研究の大きな貢献である。東京大学ものづくり経営研究センターディスカッションペーパーならびに、Academy of Management、Strategic Management Society、INFORMSという国際学会での発表が成果となる。

\* 研究実績概要は「野村マネジメント・スクール研究助成実績報告書」および財団ホームページに掲載します